

## 日本キリスト教会 大阪北教会

2016年7月17日(日) 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 ヨハネによる福音書 11章45～57節

11:45 マリアのところに来て、イエスのなされたことを目撃したユダヤ人の多くは、イエスを信じた。11:46 しかし、中には、ファリサイ派の人々のもとへ行き、イエスのなされたことを告げる者もいた。11:47 そこで、祭司長たちとファリサイ派の人々は最高法院を召集して言った。「この男は多くのしるしを行っているが、どうすればよいか。11:48 このままにしておけば、皆が彼を信じるようになる。そして、ローマ人が来て、我々の神殿も国民も滅ぼしてしまうだろう。」11:49 彼らの中の一人で、その年の大祭司であったカイアファが言った。「あなたがたは何も分かっていない。11:50 一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が滅びないで済む方が、あなたがたに都合だとは考えないのか。」11:51 これは、カイアファが自分の考えから話したのではない。その年の大祭司であったので預言して、イエスが国民のために死ぬ、と言ったのである。11:52 国民のためばかりでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死ぬ、と言ったのである。11:53 この日から、彼らはイエスを殺そうとたくらんだ。11:54 それで、イエスをははや公然とユダヤ人たちの間を歩くことはなく、そこを去り、荒れ野に近い地方のエフライムという町に行き、弟子たちとそこに滞在された。11:55 さて、ユダヤ人の過越祭が近づいた。多くの人が身を清めるために、過越祭の前に地方からエルサレムへ上った。11:56 彼らはイエスを捜し、神殿の境内で互いに言った。「どう思うか。あの人はこの祭りには来ないのだろうか。」11:57 祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスの居どころが分かれば届け出よと、命令を出していた。イエスを逮捕するためである。

### 説教『一人の人間が、国民の為に死ぬ』

◆只今の司会者の祈りに皆さんも心から「アーメン」と唱和されたに違いないと思います。今朝、朝日の朝刊で、「都議選」という見出しを捜しましたがありませんでした。ないはずがないと思って34ページ隈なく探しましたが、都議選「と」も出ていませんでした。投票日は今月31日ですからまだ2週間あるということもあるのですが、世界の情勢を見渡せば、都議選がこの程度のものなのかというか、それなりの朝日の見識を示しているのかと思いました。しますと、「新知事は自分の考えを語れ」社説が出ていました。新知事とは、都知事のことではなく、鹿児島県の新しい知事の事でした。その人も元TBSのニュースキャスターだった人でまだ50代です。彼は選挙戦で、今日本で唯一稼働している鹿児島川内原発をいったん止めて、再点検すると訴えて勝ったのです。しかし、知事になったらその主張がトーンダウンしてしまっているのです。選挙前の公約を明瞭に語り、そして公約を果たせと、こういう社説でした。

◆第1面のトップ記事は、司会者のお祈りにありましたように「トルコ クーデター未遂」と、「仏テロ IS系犯行声明」という記事でした。そしてずっと読んでいきますと、30ページに「ローマ法王の挑戦」というページ半分の大きな記事がありました。第266代フランシスコ法王の最近の言動を追ったものでした。これに同志社大の浜矩子教授がコメントを書いています。浜さんは日頃、面白い物言いをする国際経済学者ですが、カトリックなので、カトリック

信者の立場で最近の法王の言動を追って、こう言っておられます。「現法王が伝えようとしていることの本質は人の痛みがわかる「共感性」(compassion)だと思います。…多様な人々が国境を越えて出会うグローバル化の時代に、ことのほか必要ですね」とコメントしておられます。ちょっと嬉しい発見をしたような気がいたしました。正にコンパッションが大事だと思いますね。それがイエス様の全言動を貫いているものだと言ってよいでしょう。

◆私たちは先日来ヨハネ福音書 11 章の「ラザロ物語」を読んできました。今日もまた読みます。今さらのように思うのは、聖書が語ることは本当に根源的なことだということです。そして、それが今日の箇所で一層明瞭になってくるのですが、正に、世界の危機、人間の危機から、人は如何に解放され平安と平和を得ることができるのかということが、聖書が示す事柄の核心だと思います。ヨハネ伝 11 章のテーマは、簡単に言ってしまえば、「人間の死と国家の破滅」、そしてその克服の道ということです。「人間の死」の問題、これをラザロの死の問題としてわたしたちは読んできました。

◆そして今日のはじめに、「マリアのところに来て、イエスのなされたことを目撃したユダヤ人の多くは、イエスを信じた」とあります。この事がユダヤ当局者に危機感を与えたのです。ここで 70 人からなるユダヤの最高議会が召集されて、イエスの一件が諮られます。「この男は多くのしるしを行っているがどうすればよいか。このままにしておけば、皆が彼を信じるようになる。そしてローマ人が来て、我々の神殿も国民も滅ぼしてしまうだろう」と。先程わたしは、ヨハネ伝 11 章のテーマは「人間の死と国家の破滅」だと申しました。ユダヤの指導者たちは今、国家存亡の危機に陥っていると危機感を募らせています。その張本人が「イエスという男」なのだ。49 節以下にこうあります。「49 彼らの中の一人で、その年の大祭司であったカイアファが言った。『あなたがたは何も分かっていない。 11:50 一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が滅びないで済む方が、あなたがたに好都合だとは考えないのか。』」 11:51 これは、カイアファが自分の考えから話したのではない。その年の大祭司であったので預言して、イエスが国民のために死ぬ、と言ったのである。 11:52 国民のためばかりでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死ぬ、と言ったのである。」平たく言えばイエスという男を亡きものにすればいいのだと、イアファは言ったのです。

◆「当時はローマ帝国時代です。ローマの軍勢力が世界を支配していたわけです。これを「パックス・ローマナ」と言います。「ローマの平和」と訳されます。今日「パックス・アメリカナ」という言葉があります。つまりアメリカの軍勢力が日本を抑え、日本を庇護している。ですから、日本は戦後 70 年、本当の意味で独立してはいないのです。それで当時はローマの軍勢力が世界を抑えているわけです。そして今問題になっている首都エルサレムです。そこで何か不穏な動きがあり、反乱とか革命とかがあれば、直ちにローマの軍隊が出動してそれを抑える。そしてユダヤ・エルサレムを安穩に統治できないのならば、ユダヤ当局も、エルサレムも破滅させられる。そういう危機感をユダヤ当局は感じているのです。「ローマ人が来て、我々の神殿も国民も滅ぼしてしまうだろう」というのはそのような事情を語っているのです。

◆その時、その年の大祭司カイアファが立って言います。「『あなたがたは何も分かっていない。一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が滅びないで済む方があなたがたに好都合だとは考

えないのか。』これは、カイアファが自分の考えから話したのではない。その年の大祭司であったので預言して、イエスが国民のために死ぬと言ったのである。」これは要するに、「色々と思ひ煩うな。あの男一人を消せば、ユダヤ教もイスラエルも安泰なのだ。」そういう事をカイアファが示唆しているわけです。そしてこのカイアファの言ったことが実行されて行きます。大祭司カイアファの在位は紀元 38 年までとなっています。ですからイエス様の地上の歩みの十字架の年は紀元 38 年よりも前だということになります。

◆そして 51 節を見ますと「これはカイアファが自分の考えから話したのではない。その年の大祭司であったので預言してイエスが国民のために死ぬと言ったのである。国民のためばかりではなく散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死ぬと言ったのである。この日から、彼らはイエスを殺そうとたくらんだ」こういうことなのです。つまりいま、カイアファが言っていることは極めて人間的次元の策略を言っていますが、それを通して神の示しが与えられたということです。イエス様を全ての神の子を一つに集めるために十字架にかけるということは、これはカイアファが預言したように神様の御心ですね。国家の破滅を越えた神の平和がもたらされるのです。ですからイエス様が十字架につけられた時に、これで一安心と彼らは思ったでしょう。けれどもそこに本当に神様の人間的判断と違う御心がそこで成就されていったのです。これは、ヨハネ福音書の作者の解説だと言ってもよいと思います。

◆先ほど 11 章のテーマは「人間の死と国家の破滅」だと申しました。そういうことをふまえて、我々はそのような時代の中で、状況の中で、どう生きるのかということがこのラザロ物語のテーマだと思います。そしてそれは私たちの日々の問題でもあります。いま非常にそのことが解かりやすくなっている日本と世界の情勢であり、日常だと思います。それでこういうことがいつ終わるのかということですが、オバマ大統領は、今年の広島演説でこう言いました。「われわれは、核兵器のない世界を希求する勇気を持たなければならない。しかし、こうした目標は私の生きている間は実現しないかもしれない」と。これに対してもっと突っ込んだことを言ってほしいという声もありましたが、オバマさんは正直だと思いました。簡単に無くなるものなら、もうとっくに無くなっていると思います。無くならないのですよ。そしてテロも、戦争も無くならないのです。そして私たち人間の死も避けられません。

◆そういうことをふまえた上で、私たちは何を頼みとして生きていくのかということがヨハネ伝 11 章の問題です。そしてイエス様はラザロの危篤の知らせを受けてなお二日、動かれなかった。なぜならエルサレムに向かうことは、ユダヤ人たちの手にご自分の命を渡すことになるからです。それを怯えられたということではないと思いますが、覚悟を要します。ベタニヤに着いたら、ラザロは死んで既に四日経って、臭くなっていた。けれどもイエス様はマルタに言われました。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも決して死ぬことはない」と。マルタはなんのことも理解しきれませんでした。そしてこの言葉を実証するようにイエス様は死んだラザロの墓に向って「ラザロ！出て来なさい」と叫ばれますと、死んで四日経っているラザロが出てきたという話が前段にありました。つまり「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも決して死ぬことはない」と言われたイエス様のお言葉は真実だ

った。それは人間の死の現実を捉えた上での深い、高次の現実を言っておられるのです。そしてそれが事実なのだ、真実なのだという事を「ラザロ出て来なさい」と言って実証なされたわけです。だから死んでも生きる、決して死ぬ事のない命のリアリティーをイエス様は立証されたのです。◆ところで、「ラザロ」は「神、救い給えり」という意味を持つということは再三申し上げました。正に私たちの死の現実、病の現実、いろんな諍いの現実。これらは願うわけではありませんが、わたしは世の終わりまで絶えないと思います。けれども、そういう中であって、私たちは死の恐れからも、病の恐れからも、一切の恐れからも、主イエスを信じる、信じることができる時に、わたしたちはそういう一切の恐れから解放される。これが私たちの信仰ですね。ですから、私たちはこういう問題から解放されて、平和を得ることが出来るのは、われら罪人のために自分の身を捧げてくださった神の御独り子イエス様を信じるという、この信仰以外に私たちはこのドロドロの世界から自由になる道はないと思います

◆そのようなことでありまして、わたしたちの日々というのは、そういう中で意識してもしなくても生きていて、ある時、そういう現実を思い知らされます。私の実姉の木内正子さ姉が亡くなって9年になります。9月の第2日曜は毎年高齢会員を覚える礼拝です。礼拝後お祝いの会を持ちます。執事であった木内姉の司会で和やかなひと時を持ち、また来週ねと、別れた翌日月曜日に、あの事件が起き、惨殺され亡くなりました。そういうこともありました。そして今やテロだ、クーデターだと、命を落とす人が絶えない世界に生きています。そして、自分が何時何時被害者になるかもしれないのです。いまわたしたちはどこに立って生きていくことができるのか、究極の、現実の平安と平和がどこにあるのかということが、人間である限り、共通の問題だと思えます。

◆それでイエス様のことはもう2千年も前のことでありますが、「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は死んでも生きる。生きて私を信じる者はだれも決して死ぬことはない」と言われました。主イエス・キリストは、復活であり、命であられるので、正に今、私達のただ中に生きて働いておられるお方です。私達の日々は、この方を信じ、この方に守られ、この方に顧みられて生きる日々です。何時、何が起ころうとも見放されることはありません。日曜日にこうして礼拝を守るということそれ自体が、わたしたちの信仰の証しですね。ここに本当に安らぎと平和があるのです。そのことを私たちは信じ、感謝してこの道を一步一步、歩んでまいりたいと思います。

◆お祈りいたします。

憐み深い主イエス・キリストの父なる神様

あなたはわたしたちにこの聖書を与えてくださいました。わたしたちは愚かで、浅はかで、あなたがして下さったこと、語っていて下さること、それらをよく理解しないままに右往左往することの多い者ですけれども、あなたはこの聖書によって、わたしたちに十分な導きを与え、恵みを与えて下さいます。どうかあなたに縋り、あなたに頼り、困難の多い、苦悩の多い、悲しみの多い、争いの絶えない日々をしっかりと歩んで行くことができるようにお守りください。この祈り、イエス様の御名を通しみ前にお捧げいたします。アーメン。